大正期　（その７）

～「相中相高八十年」より～

7　中学生気質

第一次世界大戦に続いて世界思潮の混乱期で、日本でも大正デモクラシーのうえに自由主義が謳歌されて、倉田百三の『出家とその弟子』が読まれたかと思うと、漱石や藤村が読まれ、稀にプロレタリア文学に目をつける者もある時代であった。

この時代に若者が口ずさんで歌ったものには、“ああ玉杯に花うけて”や“恋はやさし野辺の花よ”などがあり、また映画の活弁時代（サイレント映画）で徳川夢声や生駒雷遊ら一流弁士が名調子で紅涙をしぼり、ファンを魅了させた時代であった。

“末は博士か大臣か”という立身出世の思想もまだ盛んであった。個性を尊重し合って励まし合い、各人の能力に応じて、「ヤルゾ」「ナニクソ」「負ケルモンカ」の努力と根性は、相当旺盛であった。

学生気質も質実剛健俗に言うバンカラで、イガグリ頭に小倉の袴、朴歯の下駄に汚れたタオルをぶらさげた旧制高等学校の生徒が手本であり、中学生の憧れでもあった。

大正期の相馬中学校の教育はきびしく、学業や運動の他に「操行」という人造り人格形成まで評価された。だから運動競技に勝敗があるように学業も同じであるという考えから、入学試験の合格発表や各学期、学年末の成績等は全部生徒控所や廊下に堂々と発表されたし、出席簿を始め教室の座席や下駄箱や控所の道具箱も成績順に並べられた。

しかし当時の生徒は案外平然としたもので、成績を友人と比較して競争し合うといった風潮は無く、自己の学力向上一点に努力を集中した。

生徒は朝登校すると控所に入って自分の場所に持物を全部入れて、始業ラッパに合せて授業時間に合せて教科書を持って授業に臨んだ。

授業における先生方の指導にも熱が入り、予習をしないで授業に臨むものなら叱りとばされ、ボヤボヤしておられなかった。数学の問題など解きかねて、たっぷり一時間黒板の前に立ちつくすことなどよく見られた。

県内の旧制中学校の数は、明治期には６校、大正末期でも 12 校と、現在と比べ遥かに少なかった。そのため、地元出身の先生は二、三人で、他は全国各県出身の先生たちだったから、授業中のお話にもお国訛りもおかしく個性溢れる授業風景であった。

（11 月 27 日　転載文責　村山）